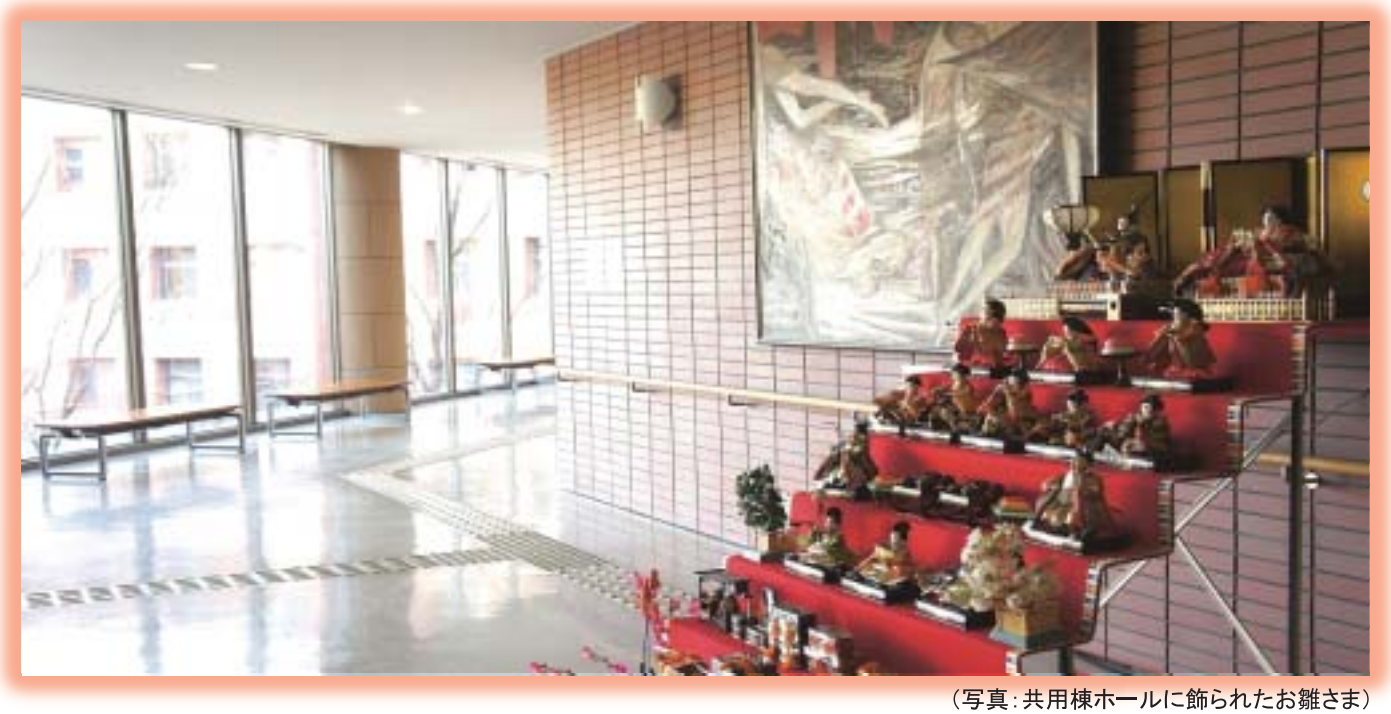
同窓会会報

高知県立大学看護学部

第6号
平成25年3月15日発行
〒781-8515　高知市池2751-1



（写真：共用棟ホールに飾られたお雛さま）

ごあいさつ

同窓会会長　梶原和歌

私たちの看護学部同窓会は、新法人「高知県公立大学法人 高知県立大学」設立の前年に発足し、3歳となりました。同窓会から南 裕子理事長兼学長と副学長に野嶋佐由美先生を送り出せたことはとても名誉なことです。

阪神大震災から早や18年が経ち、2年前の東日本大震災の死者18,877人を出した犠牲体験から多くのことを学び続けています。南海トラフ巨大地震への備えを急務としている今、人々の命と生活を守る看護力に基盤をもって、母校では「災害看護グローバルリーダー」の養成という新しい取組に、共同大学院（国公私）の形で中核として準備を進めておられます。「地域・組織を超えて俯瞰的問題解決と発言のできるリーダー」構想について機会があれば、具体的な夢をぜひお聞きしたいと思います。

そのほか高度実践看護師育成の教育課程を増設し、クリティカルケア看護学領域の充実を図るなど目覚ましい努力をされています。私たち卒業生は、「ご先祖組」「中堅活躍組」「初心開拓組」と、特性を生かして何らかの形でバックアップしていきたいと思います。そして次回の同窓会総会では、青春の再現を喜び合いたいと思います。サミエル・ウルマンの青春の詩の一部を紹介しごあいさつとします。

<YOUTH青春>　Youth is not a time of life-it is a state of mind; it is a temper of the will, a quality of imagination, a vigor of the emotions, a predominance of courage over timidity, of the appetite for adventure over love ease.

No body grows only by merely living a number of years; peoples grow old only by deserting their ideals. Years wrinkle the skin, but to give up enthusiasm wrinkles the soul. Worry, doubt ,self-distrust, fear and despair-these are the long ,long years that bow the head and turn the growing spirit back to dust.

主な内容

①同窓会会長ごあいさつ
②災害看護学における先駆的取り組み
③ようこそ　先輩！
④高知女子大学で教員としてご指導いただいた先生からのメッセージ
⑤活躍する同窓生
⑥夏銀河～学生ボランティア活動支援
⑦温故知新　その2
⑧看護学部の活動

災害看護学における先駆的取り組み

文部科学省「平成24年度博士課程教育リーディングプログラム」に、「災害看護グローバルリーダー養成プログラムーDNGL」が採択されました。本プログラムは、高知県立大学大学院を責任大学院として、国公私立5大学が共同して災害看護におけるグローバルリーダーを養成するものです。責任大学院として、南裕子学長、プログラム責任者の野嶋佐由美先生、プログラムコーディネーターの山田覚先生のもとに、実施されています。

このような共同大学院プログラムは、わが国で初めてのものであり、看護教育界はもとより、国内外から今後の活動が大変注目されています。そこで今回、本プログラムコーディネーターである山田先生に、プログラム概要について紹介をしていただきます。

災害看護グローバルリーダー養成プログラムーDNGL（global leadership training program in disaster nursing）

<はじめに>

東日本大震災は、被害規模や広域性、原発事故という複雑性から、従来の枠組みや方式では、十分な支援を提供しえない限界を明らかにしました。激化し増加する自然災害、テロ攻撃を含む人為災害、そして新たな感染症の流行等、予期せぬ災害や不測の事態に備える必要があります。人々の生命と健康危機へ対応する災害看護グローバルリーダー(DNGL)の育成が急務と考えられます。本プログラムにおいて、世界規模で人々の生命と健康危機へ対応する実践力と、災害時に関わる多職種との活動を統括する能力を備えるリーダーを育成します。

<概要>

災害看護グローバルリーダー養成プログラムは、災害看護グローバルリーダーを5年一貫の大学院博士課程教育で養成するものです。高知県立大学、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、日本赤十字看護大学、千葉大学という、日本の看護を臨床・研究・教育の全分野において牽引してきた国公私立の5大学が互いに補完し合い、1つの大学院に留まらず、国際・学際・産官学連携を網羅する俯瞰的なプログラムを提案するものです。平成26年4月に、大学院共同災害看護学専攻の開設を目指しています。本専攻は、各大学院の研究科にそれぞれ開設され、仮想的に1つにまとまり1つの専攻になります。

<本プログラムの目的>

他の近接学問と相互に関連・連携しつつ、学術の理論および応用について産官学を視野に入れた研究を行い、特に災害看護学に関してその深奥を極め、人間の安全保障の進展に寄与すること。

<本プログラムの目標>

日本ならびに世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応し解決できる高度な実践能力かつ研究能力を兼ね備え、国際的・学際的指導力を発揮するグローバルリーダーを養成すること。

<養成する人材像>

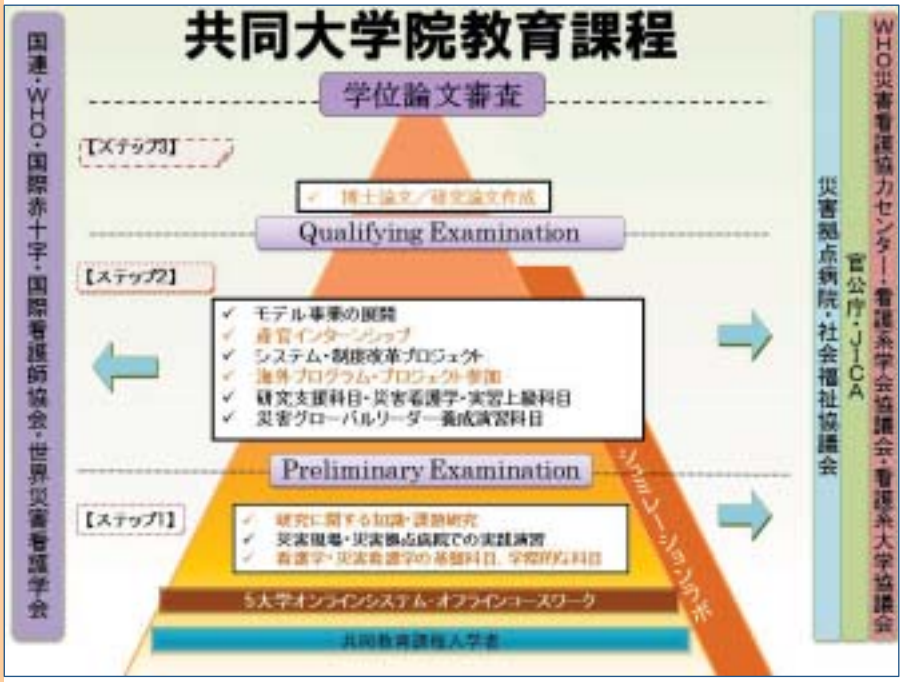
本プログラムは、以下の3つのステップで人材を養成して行きます。

ステップ1：学際的・国際的な基盤で研究開発し、産官学と連携し、変革に向けて提案推進できる人材

ステップ2：災害サイクルのすべての段階で「健康に生きるための政策提案」をできる人材

ステップ3：学際的・国際的な基盤で研究開発し、産官学と連携し、変革に向けて提案推進できる人材

即ち、人々の命と生活を守る看護力を基盤に、先見性、独創性を持って、災害サイクルにおける「人間の安全保障」の実現に、グローバルに貢献する人材を養成して行きます。



<共同大学院教育課程>

養成する人材像のステップに従い、先ずは「研究に関する知識・課題研究」、「災害現場・災害拠点病院での実践演習」、「看護学・災害看護学の基盤科目、学際的な科目」を修めます。

Preliminary Examinationを経て、「モデル事業の展開」、「産官インターンシップ」、「システム・制度改革プロジェクト」、「海外プログラム・プロジェクト参加」など、より実践的かつ国際的なプログラムに参加し、「研究支援科目・災害看護学・実習上級科目」、「災害グローバルリーダー養成演習科目」を修めます。Qualifying Examinationを経て、博士論文／研究論文の作成に取り掛かり、学位論文審査へと至ります。

この間、シュミレーションラボセンターを活用し、シミュレーションを通した教育も行います。また、上記の教育において、海外では、国連、WHO、国際赤十字、国際看護師協会、世界災害看護学会等と連携し、国内ではWHO災害看護協力センター、看護系学会協議会、看護系大学協議会、官公庁、JICA、災害拠点病院、社会福祉協議会等と連携して教育を行います。

<災害看護シミュレーションラボセンター>

これまで経験していない緊急で大規模な事態に備え、対処と問題解決が行える能力を育てることを目的とし、「社会・組織・生体シミュレータ」を開発・運用します。様々な議論、状況判断・意思決定・リーダーシップをとる、など、リアルタイムに迅速に国内外の学生が議論でき、アドバイザーやメンターが指導できるシステムを構築します。

<学際力>

5大学のそれぞれの大学院が持つ、異なる分野の研究科と協働して、豊かな学際力を身につけます。

<国際力>

5大学が持つ幅広いネットワークや経験、そしてDNGLのための新たなグローバルネットワークの開拓を通し、世界の現場やリーダーから学ぶ中で、グローバルヘルスの問題分析能力、多文化共生コミュニケーション、異文化間の交渉能力を培い、グローバルスタンダードを構築し、そして国際機関を活用して、それらを普及・実現する能力を養います。

<産官学連携モデルでの有機的な教育研究活動>

減災連携モデルの中で、学生がNeedsとSeedsを汲み、インターンシップや研究を行います。将来のキャリアに繋がる研究やインターンシップフィールドを確保するばかりではなく、産官学の種々の組織と連携することにより、新たな価値を創造し、具現化します。

<本プログラムの教育成果・発展性・波及効果>

災害看護グローバルリーダー養成プログラムの確立により、教育成果として、多元的・組織的な視点から災害現象を捉え、学際的、国際的な枠組みで解決することができ、ローカル/グローバル課題に災害看護の専門性を活かして、リーダーシップを発揮する人材の継続的育成をすることができると考えます。また、発展性として、災害サイクルを基盤とし、シームレスな看護実践学の構築・参画型の減災、および学際的研究方法論の拡大による、新たな研究課題の探求、学問の発展が可能です。また、看護のパラダイム転換（グローバル化、学際・複合領域的、学問体系再編）および、学際的協働モデルによる、人間の安全保障システムの提供ができるものと考えます。

波及効果として、国公私立共同　教育・連合教育の発展、および国公私立の枠組みを超えた大学院群の形成に寄与し、大学院教育改革の世界モデルの提案、そして地球上の安全・安心社会づくりに貢献し、人間の安全保障の推進に繋がるものと考えています。（災害看護グローバルリーダー養成プログラムホームページ http://www.dngl.jp/ ）

ようこそ 先輩！

甲田 禮子さん（3期生）

昭和32年3月に卒業した私は、保健婦として高知県に就職、以来非常勤も含め42年間、仕事をさせていただきました。小学校2年生の時出会った町の小さな診療所の美人で優しい看護婦さんに憧れ、「優しい看護婦さんになる」と決め、迷いもためらいもなく看護の道に進んだのでした。ひょんなことから保健婦になったのですが、看護の基本に変わりはなく、ずっと仕事を続けてこれたことをほんとうに幸せだったと思います。

卒業直後、駐在保健婦として山林に赴任しましたが、専門家をふりかざし、「住民のため」と、新米なのにずい分生意気な保健婦だったと思いますが、役場の皆さんの寛容や時代が許してくれたのだと思います。

嬉しかったことを一例。色々な職場を経て高知市の担当となった時、中央公園で集団検診に従事していると、一人の中年の女性から「下八川に居た保健婦さんでしょう」と声をかけられました。「あの時、丸を付けてもらった股関節異常の子、もう大学生になりました」とのこと、今は市内に住んでいる由。声をかけて下さってありがとうでした。同じ地区で痛恨の事例もあります。脳梗塞で半身不随の患者さんを乏しいリハビリの知識と技術でどうにか起き上がり、膝でずりながら部屋で動けるようになった時、死を選ばせてしまったのです。近所の方達から、家族との不和があったと聞かされました。頻回に訪問したのに家族関係の表面しか見えていなかった私の未熟さが原因でした。

長い間には、本当に色々なことがありましたが、私は自分を褒めてあげたいと思っています。それは看護の仕事は素晴らしいと思えること、その仕事を選んだこと、この仕事を好きと心から思ってきたことです。

最近、主人の付き添いで、医療センターに行くことが多くなり、大学を眺めるのが楽しみになっています。昭和32年の学舎を思うとまさに隔世の感があります。学舎に守られている内容は、世界にも誇れるものだと思います。

時代の流れの中で、大学の発展には多くのご苦労を伴うものと思いますが、どうか乗り越えてと願っております。そして看護の仕事を好きと思う学生の皆さん、後輩の皆さんの知識と技術を追っかけるエネルギーに心から期待しております。

近田　敬子さん（7期生）

私は、1961年の卒業生です。すなわち、半世紀以上にわたり看護の仕事に従事してきたことになります。我ながら‘よくも続けてこられた’と、驚きを隠せません。

看護という職業だったからこそ、多くの方々に支えられて活かされ・活かして、今日に至ったと言えましょう。看護職でなかったならばこれほど豊かな人生を歩むことはなかったとさえ思えます。

最も経験の長い領域は看護教育の分野です。看護専門学校での教育に始まり、短期大学および大学での教育に従事してきました。不思議なことに、どの教育の場も新設の課程で、新しく教育を創り上げるという貴重な経験をしました。常に‘育てるとは？育つとは？’を問い続けながら、ドキドキ・ワクワクの日々でした。いつの間にか、看護教育学の道にのめり込み、そのことによって看護基礎教育に続く、継続教育に関心を払うようになりました。看護界においては、看護者の資質の向上は永遠の課題です。一人の教育分野に携わる看護者として、何らかの貢献ができれば幸いと考え、現役の仕事を持ちながらも地元の協会活動に従事しました。

折しも、阪神淡路大震災に遭遇し、被災者への支援が望まれていた中、看護協会は避難所等での救護活動から仮設住宅訪問活動へ、そして健康アドバイザー事業、および「まちの保健室」事業へと移っていきました。この「まちの保健室」事業は現在に至っても、兵庫県全域に一般化させて、約500ヵ所で一つの協会事業として継続しています。看護職が取り組む「まちの保健室」は社会貢献の場として、とても有意義な活動であるとともに、看護基礎教育および継続教育と絡ませれば、自らを高める教育的経験の機会になると信じています。

最近強く思うことは、看護や教育の対象者を如何に主役にすることができるかの教育の実現です。「まちの保健室」活動でいえば、来室者個人への看護サービスに終わることなく、住民の一人ひとりを地域の健康推進者として、積極的に主人公にしていく営みが必要ではないかと言うことです。これは、教育観であるとともに援助観です。

どうも、‘’教育＝援助’をキーワードにしながら歩んでいる私が存在しているようです。その原点は、高知女子大学の教育にあると思います。教育という力は見えにくいですが、確かに浸透している自分を感じる昨今です。

中島　紀惠子さん（4期生）

このコーナーの1番バッターらしい。まだ上に1番がいるのにとは思うが、母校を巣立って半世紀以上にもなれば1番も10番もないか、などとも思える。退職して2年になる。
仕事大好き人間が、悠々自適の生活に上手く馴染んでいけるものだろうかと多少の不安をもっていたが、結構面白く生きている。

どんな組織も50年間も何事も変わらないという組織なら、もうその組織は死に体だと思って私は私の職業人生を歩んできた。だから、私が卒業した数年後に高知女子大学家政学部衛生看護学科の「衛生」が取れた時はうれしかった。家政学部から看護学部になった時は祝杯をあげた。新しい学部が次々と誕生し新校舎が出来ていく様をサポーター気分で誇らしくみていた。しかし「女子」が消えて高知県立大学に校名変更されたときは母校が遠くに行ってしまった気分になったことだった。このしぼんだ気持ちも、公立大学法人になり、後輩の南裕子さんが理事長・学長になるときいた時は、腹にずしんと応えるような満足感に数日浸っていた。

1955年に私は北海道帯広市から高知女子大学に進学した。それから卒業の時まで、2つの連絡船を渡り、土讃線の美しい光景を目にしつつ約54時間の旅が続いた。国内線の飛行機もテレビもない時代である。毎日異文化に触れて何かを吸収していた。大勢の人のお世話になって、大学生活を謳歌した4年間であった。卒後は、“何もない”と謡われたあの襟裳岬をエリアとする辺地の保健師になった。27歳で室長になった。だが当時のことであるから女性にはその先を行くポストがない。転職を考え始めた頃、和井兼尾先生や木場冨喜先生始め母校から親身のご支援をいただいた。先輩のお世話にもなった。こうして、私の大学教員の道が開かれた。教員になってからはことある都度に後輩たちのお世話になった。

看護系大学の設立は、1952年の我校と翌年にできた東大の新設以降1975年頃までは遅々として進まなかった。この約35年間を第1次創設期とすると、第2次創設期は1975年から2005年までといえるかもしれない。この区分はあくまで私的体験によるものだが、私の人生の4分の3はこの第2次創設期にあたる。幸いにも、幾つかの看護系大学づくりに加わり、当事者として看護系大学ならではの文化・風土が築かれていくプロセスを仲間と一緒に歩んでこられた。　第1回生を送り出す前には必ず同窓会を作ることを学生や教員にお願いしてきた。

同窓生にとって母校は、自分の誇りの場である。また母校は、同窓生が社会に誇れる存在であり続ける責任と義務がある。そして同窓会は、母校に無条件の信頼を貯蔵し続けていく＜集いの場＞なのだと思う。

島内　節さん（9期生）

同窓会の皆様こんにちは。私は第9回卒業生です。
皆様とはたびたび、または稀におめにかかる方と一度もお目にかかったことがない方もいらっしゃいますが、同窓生と聞けば赤い糸で結ばれているように身近に感じます。
もうはるか昔に学び舎の高知女子大学を卒業と同時に離れて、横浜に3年、その後東京に住み、東京に自宅をおいたまま2年前から広島で働いてます。

その間、世界と日本の社会・経済・生活のうねりを感じるような激しい変化に伴って看護界も大きく変化・発展し、それはますます加速的な変化を続けています。

わくわく、感動、悲しみに打ちひしがれるようなことを様々な遠くの国での出来事も国内の出来事も身近なこととしてまさに地球は一つのうねりが、全世界に拡大することを実感しています。

こんな時代に日本では平成4年の看護師等の人材確保法によって看護大学が急速に増加し、学部・大学院が増え続けています。全国大学数783校（平成24年12月21日文部科学省）のうち、看護大学の数は209校（日本看護系大学協議会会員校数平成25年2月）と28.8%と大きな割合を占めるようになり、発言権は拡張しています。

看護は国民の健康と生活にとって誰もがその必要性に直面する時がある普遍的で身近なものとして、その需要は増大しています。

私の個人史は横浜で病棟看護師、国立衛生学院、東京医科歯科大学、国際医療福祉大学において学部と大学院教育に従事し、現在は広島文化学園大学大学院で研究科長をしています。

こんな時代の流れを受けて看護大学や大学院で活動を続けていると個人的には定年が次第に延長している現状があり、その波に乗る1人として看護の現役で若者とともに楽しい時間を生きていられることに感謝しながら暮らしています。新しい看護の開拓を私は専門の在宅ケアの研究教育で多忙な日々を過ごしておりますが、いつも高知県立大学は私のバックボーンとして自分の拠点であり、その発展とともに歩いていきたいと願っているこの頃です。

高知女子大学で教員としてご指導いただいた先生からのメッセージ

‘学生に育てられて’　菊井 和子先生（3期生）

私の手元に「結核患者周辺における抗酸菌の汚染度に関する調査」（高知女子大学紀要第11巻）という古い論文の別刷りがあります。これを書いたいきさつを手掛かりに高知女子大学看護学科の教員時代の思い出を述べてみます。

私は、1961年4月、教員として高知女子大学に奉職することになりました。丁度、アメリカのコロンビア大学でヘンダーソン理論を学んで帰国したところで、これを後輩に伝えたいという思いが胸に溢れ、かなり緊張していました。時は春、新学期を迎えたキャンパスにはクローバーの緑がのどかに拡がっていました。

ところが現実の仕事環境はなかなか厳しく、私の主な役割は病院で臨床実習の指導にあたることでした。学生と共に内科、外科、小児科、結核と病棟を巡りました。当時は感染症が死因の上位を占め、特に結核看護は教科の中でも重要視されていました。結核病棟実習という特別枠があり、そこでは内科的無菌法の指導を行いました。看護婦詰め所は清潔区域、病棟は汚染区域とされ、看護婦が病棟へ行く時は先ずマスクを付け次にホルマリンボックスからうやうやしく取り出したガウンを着用することになっていました。手術室における外科的無菌法とは逆に、ここではガウンの外側は不潔（汚染）、内側は清潔とされていました。詰め所は清潔なのに病棟には菌がウヨウヨしているという前提で、それが洗濯を重ねて薄くなった木綿のガウン1枚で防げると信じての技術指導でした。

ある日、学生から質問されました。

「ホントに病棟は結核菌に汚染され詰め所は清潔なのですか？根拠があるのですか」

私は虚を衝かれました。テキストを必死に読み、先輩に教わったことを特に吟味もせず、そのまま学生に伝えることに特別の疑問も不信感も持っていなかったのです。

過去の知識・技術を検証し、根拠に基づいて更に発展させてこそ、大学で看護学を教育する意味があるのではないか。頭をガンと殴られた思いでした。県衛生研究所の坪崎教授、小野研究員（当時）の指導のもとに学生と共に患者周辺の結核菌（抗酸菌）の検出を試み、その結果をまとめたのが上記の論文です。この論文は看護界からは一顧だにされませんでしたが、私にとっては大学教育の意味を知るきっかけとなった大切な論文です。

振り返れば、私は常に学生の瑞々しい感性と鋭い質問で育てられました。 ちなみに、かの学生は今は看護管理の第一人者に成長した梶原（菅）和歌さんです。

大名門 裕子先生（17期生）　現　宮崎県立看護大学看護学部　教授

高知女子大学家政学部衛生看護学科17期生です。大学卒業後、四国がんセンターで看護師6年目の7月から千葉大学看護学部成人･老人看護学講座の助手に割愛されました。4年制大学卒で臨床経験が5年以上の条件を満たす（弘前大学や徳島大学の教育学部特別看護教育課程卒、聖路加看護大学卒他）同僚が各講座に次々就任し、3年次生になる1期生の臨床実習のフィールド開発から開始しました。各講座の教授は医師でしたが多くの生き方を学び、東京大学・エール大学・イリノイ大学等で看護学の学位を取られた助教授の先生方に「読んだ文献はこれだけ!!」とか「こんなに勉強しない集団はないわね･･･」と言われてももうひとつピンこない頭を刺激し合いながら、自分達が考える事を形にしていくおもしろさと研究的思考を学びました。知とつながる臨床での現象像は豊かがいい。

7年目の4月、大学院にとの話もあったのですが、「あなたは高知から預かった人なので返さないといけない」との教授からのお言葉があり、「何それ本人は全く存じませんぜ」とか、こういうのを晴天の霹靂というのかなとか思いつつ、少々引っ越しのトラブルがあり4月4日「1日の辞令なのに」と学長から一言いただいて母校に講師として着任しました。「下の学年は成人看護学を教える専任の先生がいていい、私たちはおらんかった」という学生からの一言にびっくり。千葉大学での思考･実践体験から10年くらい時間がバックしました。当初は千葉大学での有り様と折り合いがつけれなくて「たたいてもでてくるのは埃ばかりや」と思いましたが「当初から4年制大学として生き抜こうとしてきた時間 、1クラス20人ということの意味、上下学年の交流、それらによってつくられてきた誇れる文化があるらしい」と思うようになって12年間があっという間に過ぎました。助手の時には部分へのかかわりであった講義展開については成人看護学（老人看護学も）全体を見渡し講義総時間も考え合わせて組み立てることで見えてくることがたくさんありましたし、組織運営の役割を経験することで見えてくることもたくさんありました。辞職して千葉大学大学院博士後期課程にすすみましたが、学生達から私も大学院に進もうという声が聞こえてきたことは最後のびっくりでした。皆さん現役で活躍中ですね。職務上の責任がない3年間は自分の思考をまとめるのに貴重な時間であったようです。

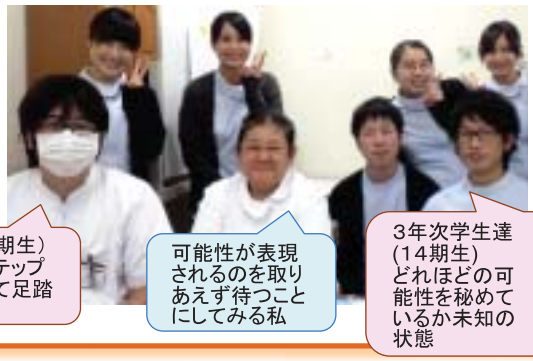
なぜか現在の職場に来るようになりました。開学2年目に着任しましたが、ここではさらに10年バックした感でしたが、はや15年が来ようとしています。教育の場に入って歴史的時間の一巡りと言われる30年が過ぎました。

「こうなったらいいよねー」に答えてアイデアと実行につなげられる、

「これはこうするといいのよね」と一緒にとりくめば実行につながる、

「どこがわからないかなー」と一緒に取り組んでも実行に至らない･･

でも可能性の表現をまってみる。



活躍する同窓生

青木 美保さん（34期生）

わたしは、現在、お茶の水女子大学大学院ライフサイエンス専攻遺伝カウンセリングコース博士後期課程に在籍しています。本課程は、学会認定の遺伝カウンセラー養成コースです。

認定遺伝カウンセラーは、アメリカでは30年以上の歴史があり、広く認知されてますが、日本では近年やっと認知されつつあります。遺伝カウンセラーは、病院や研究所、製薬会社、遺伝子検査会社等で働いており、主な仕事は、医療機関で遺伝性疾患を有する可能性がある方の遺伝学的診断、遺伝リスク評価、医学的管理等における情報提供と心理社会的な支援等を行い、患者さん自らがよりよい選択をできるよう支援することです。

わたしが大学院への進学を決めたきっかけは、41歳のときの自身の乳がん体験によります。その時、遺伝子を標的にした分子標的療法である新しい抗がん剤治療のおかげで、手術を受けることなく、がん細胞が消失するという奇跡のような体験をし、さらに遺伝子について理解したいと思いました。

そして乳がん治療が一段落したとき、アメリカの乳がん治療の現状を知るため、ジョンズ・ホプキンス・ブレストセンターを見学し、看護師のリリー・ショックニーさんが書かれた乳がん患者に向けた本に出会いました。看護師ならではの視点で書かれた素晴らしい内容に感動し、日本でも紹介したいと思い、編訳・出版させていただきました（「生きるための乳がん」三一書房、「再発・転移性乳がんを生きるための100の質問」彩流社）。

私が学んでいるコースでは、遺伝学および多岐に渡る遺伝性疾患に関する講義はもとより、医療機関での臨床実習を行い、3年間の課程修了後には、資格試験を受けて認定遺伝カウンセラーの資格を得ることができます。

わたしの主治医である山形先生（鈴木杏樹さんのご主人）は、先日ニュースで報道された先生ですが、先生が最期まで患者さんのために頑張り、真摯な姿勢で向き合い、診療を続けていたことが印象に残っています。6年前にわたしも主治医や看護師をはじめ、さまざまな医療者の方々や家族に支えられ、今の自分が存在していることに感謝しつつ、将来は、がん関係の医療機関で遺伝カウンセラーとして、がん患者さんや家族の支援をしていきたいと考えています。

表紙の写真の紹介

本会報の表紙の写真は、池キャンパス共用棟ホールに飾られた7段飾りの雛人形です。池キャンパスに看護学部が開設（平成10年）されてから、平成23年末まで池キャンパスの警備を務めてこられた山本繁次さんが、わが娘の成長のために飾ってこられたものを、看護学部の学生のために退職してからも飾ってくださっているものです。

山本さんは、お雛様だけでなく、看護学部の廊下に奥様とご一緒に季節折々に花や木々を生けてくださり、看護学部の学生はもとより、それを見る人々に、安らぎや季節の移ろいを感じさせてくれています。

ひな祭り一口メモ

ひな祭りは、古くは「上巳の節句」「弥生の節句」などの呼び名があり、五節句（「人日」「上巳」「端午」「七夕」「重陽」）の一つにあたります。女の子がいる家ではこの時期にひな人形を飾り、白酒や桃の花を供えてお祝いします。

夏銀河～学生ボランティア活動支援

はじめに:『夏GINGA』での活動

高知県立大学と高知短期大学の学生47名が、二期に渡って岩手の沿岸部を中心に東日本大震災復興支援のボランティア活動を行いました。この活動は、岩手県立大学の学生が中心となって結成された『NPO法人 いわてGINGA-NET』が全国の大学生に呼びかけて、行っているものです。今回の『夏GINGA』では、仮設住宅での地域のコミュニティ形成を目的とした住民の方々との交流や、学力向上を目指した子どもたちへの学習支援などを行いました。全国各地から集まった学生たちと語り合い、「この地域のニーズは何か、自分たちに何ができるのだろうか」と試行錯誤しながら、催しを企画実施してきました。

『いわてGINGA－NET』とは

2011年にスタートした学生ボランティアによる岩手県被災地での東日本大震災の復興支援プロジェクト。これまでのべ1万人が全国から参加し応急仮設住宅を中心としたコミュニティー支援などを行っている。災害発生時における学生ボランティアの滞在拠点整備、運営、若者のマンパワーと地域のニーズをつなぐ仕組みとして継続している。
（参考:『いわてGINGA－NET』ホームページより）

引き継ぎの日、高知県立大学法人の参加者（6期と7期）全員集合

被災地を草や花が覆っていました

瓦礫はまだ残されたまま

私たちが学んだこと。「目で見て耳で聞いて心で感じる」という大切さ。やってみないと分からないことが沢山あるということ。感じたことを人に伝えることは難しい。銀河の活動では考える時間が沢山あった。学生ならではの活動はなにか、何ができるのか。企画を考え実行し、繰り返し振り返ることで前に少しずつ進んでいった。仮設住宅の方々に様々なお話を聞いた。まだまだ完全復興には程遠いけれど、地域の方々の笑顔を見てこの町の未来を感じた。

将棋対決！

地域の声を聞く

イベント企画
～健康体操～

仮設住宅にて

お茶っこサロンでは、地域間のコミュニティー形成を目的に活動してきました。被災された場所もバラバラで集められた仮設住宅の方々(自分の生まれ育った地域から離れさまざまな思いを抱え、新しい環境で生活をされているという現状)のニーズは何かを考え探す毎日でした。

わかめの養殖で使った縄の片づけを手伝った。漁師さんたちは最初、よその若者に何ができるのだろうかと不安そうな表情だったが、私たちが一生懸命取り組んでいる姿をみて、最後はみんなで笑顔になった。漁師さんたちは「次は君たちの番だ」と言ってくれた。どんなことも一生懸命やってくれる、そんな若者に未来を託していた。

わかめの養殖をお手伝い

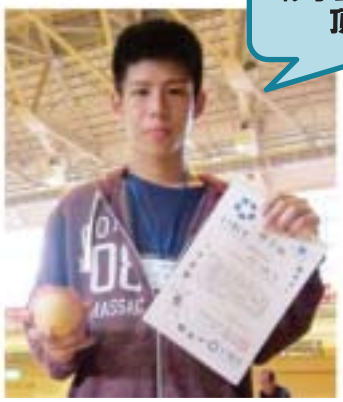
イベントに参加してくださった皆様と！

協力してイベントを準備中！

中高生の学習支援や仮設住宅での『子どもの居場所づくり』の支援をさせていただきました。出会った頃はどう接していいか分からず、輪に溶け込むことが難しかったのですが、ふれあうことで笑顔のある時間を子どもたちと一緒に過ごすことができました。今後は子どもたちの将来の夢を実現する支援や、仮設住宅でも近所を気にせず遊べる場所づくりに力を入れていく必要があると感じました。

欠かせないミーティング！

～自分たちは何ができるのだろう～


修了証書とリンゴを頂きました

おわりに

地域によって住民の特色があり、ニーズを正確に捉える難しさを感じながらも皆で意見を出し合い学生なりにできることを模索してきました。私たちはこの学び、経験を今後の糧にしていきたいと考えています。

学生がこのような活動をするにあたって、貴重な資金援助をいただきました高知県立大学看護学部同窓会の皆様、本当にありがとうございました。

温故知新　その2

高等看護學講座　（株式會社醫學書院）1952年発刊　　全20巻

前回に引き続き、高等看護學講座のご紹介をいたします。

【看護婦の身のもち方】（第2巻　看護倫理　第3章より抜粋）

※文献引用につきましては、医学書院の方に承諾をいただいております

・職務に対する誠実

人の生命にかかわる重任を負う看護婦は過失に陥らないように、物事をなすには慎重に計画をたて、注意深くなければならない。家庭でも、よく道具をこわす癖の人があるが、看護の仕事でもそのような人がある。特に神経系統の障害がない限り、これは不注意、粗暴な結果であって、訓練によって矯正できる。（中略）仕事を始めてから、これがない、あれがないとあわてるようでは、仕事は順調に運ばないし、過失も多い。行き当たりバツタリ主義でなく、すべて仕事を始める前に、仕事の成り行きを予想して、綿密に準備計画して仕事を始めることを常々の習慣としなければならない。

・容姿

看護婦の容姿は清楚な美しさが尊ばれる。看護婦の美しい姿は患者の慰めであり、萎えた心を引き立たせるのであるが、煽情的であつてはならない。口紅、パーマネントウェーブを禁ずるのではないが、人の眼に清らかな感じを与える化粧、身だしなみが望ましい。（中略）ゆがんだ姿勢は観る人を不快に感じさせ、健康な正しい姿勢は、清らかな力強さを印象づけ、尊敬、信頼の念を起こさせる。看護婦は日頃正しい姿勢を保つに注意すべきである。

・学習

看護婦は心の修養に努めると同時に、看護の職務に必要な知識と技能を向上させるために、絶えず勉強しなければならない。学生時代の養成教育は基礎教育に過ぎないのであつて、真の才能は卒業後に発達する。日々の勤務について、つまらないことでも忠実に勤めると、興味が沸き、研究工夫することによつて著しく上達する。自分の才能を伸ばすことを怠つてはならない。それには先輩、同輩の協力、医師の指導も必要であるが、先ず第一に自発的に勉強する意欲が肝腎である。人に仕向けられなければ、勉強しない人は、そうしても修得するところは少ない。自主的に勉強する熱意がなければ、何をしても無駄である。

現在、私達が自身を省みてそうありたいと願い、また学生に対してそうなって欲しいと思う看護師の姿が、1952年（昭和27年）当時からあったことを改めて感じることができるのではないでしょうか。

教科書やその他の古い看護の文献、あるいは看護の雑誌等をお持ちの方で、寄贈してもいいとおっしゃる方がいらっしゃったら、是非下記までご連絡・ご送付【連絡後、送料受け取り人払い】下さいますようお願い申し上げます。

〒781-8515　高知市池2751-1　高知県立大学看護学部同窓会　088-847-8718　(担当：川上理子)

看護学研究科＆看護学部の活動

専門看護師（Certified Nurse Specialist）の活躍

本大学院看護学研究科では、日本看護系大学協議会の専門看護師教育課程）の認定を受けて、現在8領域（家族看護学・精神看護学・地域看護学・在宅看護学・老人看護学・がん看護学・小児看護学・慢性看護学）で専門看護師を養成しております。平成25年度には、新たにクリティカルケア看護学領域で専門看護師養成を開設します。

専門看護師は、各専門領域の現場において、複雑で解決困難な課題に積極的にチャレンジし、高度な看護の専門性を発揮して、現状を変革すべく活動しております。平成24年度は、8名の専門看護師が誕生し、全国各地の臨床現場で活躍をしています。

本研究科では、これまで7領域で55名の専門看護師を輩出しています。

領域	がん看護	家族支援	慢性疾患看護	精神看護	地域看護	老人看護	小児看護
人数	23	4	2	14	2	2	8

（2012年12月）

看護学部4回生が、「薬物防止教室」の講師を務めました！

平成24年11月28日、高知市第六小学校で「薬物防止教室」が開かれ、看護学部4回生の高橋朋子さんと山本翔子さんの2名が講師を務めました。

この催しは、高知市内で活動する高知桜ライオンズクラブが主催する事業です。連携の発端は、本学の名誉教授で同窓生の山崎美恵子さん（5期生）が同ライオンズクラブのメンバーで、「子どもや若い人たちに情報発信するには、同世代の人が講師を務めた方が良いのではないか」と、本学の地域教育研究センターに連携を提案し、実現しました。

看護学部と文化学部の学生11名が参加を申し出て、「麻薬・覚せい剤乱用防止センター」の講習会に参加し、同センターが認定する講師資格を取得しました。

高橋さんと山本さんは、28人の6年生を前に、薬物の怖さや、幻聴や失明、脳の萎縮などの薬物乱用が引き起こす悪影響を子どもたちにわかりやすく説明し、講義を行いました。

11名の学生たちは薬物乱用防止の啓発活動を行うサークルを結成し、高知桜ライオンズクラブと協働しながら、今後も県内の小中学校などで啓発稼働を行う計画です。

高橋朋子さん　　山本翔子さん

同窓会総会＆「シャンソンの夕べ」のご案内

日時：平成25年7月20日(土)　18：30～21：00

場所：ジャズ喫茶「ALTECアルテック」(高知市北本町4-4-23ヤングプラザ2F)

　　高知駅（南出口）前から東へ徒歩約13分

参加費：2,700円

参加申し込み：　振込用紙または同窓会事務局　Fax：088-847-8750　(締め切り：6月30日)

参加費の振り込みは、会報6号に同封されております振込用紙をご利用下さい。

1980年代の雰囲気を味わえる高知のライブ会場です

ご寄付をいただいた方

下記の皆様より寄付をいただきました。誠にありがとうございました。（敬称略　平成25年2月28日現在）

中澤　フミエ	（3期）	金谷　ひろみ	（10期）	三宅　知子	（27期）
中島　紀恵子	（4期）	佐藤　美穂子	（18期）	橋村　恵理	（32期）
福岡　恵美子	（5期）	伊与田　芳子	（22期）	福原　真理	（33期）
山﨑　美恵子	（5期）	芝田　美千代	（23期）	増野　園恵	（35期）
岡田　渓子	（7期）	飯沢　由里香	（26期）		

寄付のお願い

同窓会への寄付のご協力をよろしくお願いいたします。
寄付金は、同封の振込用紙にてお願いします。ホームページでもご覧いただけます。
ご不明な点はいつでもお問い合わせください。

編集後記

同窓会会報も皆様方のご支援・ご協力をいただき、お陰様で第6号を発行することができました。

本号では、同窓生であり、母校で教育指導に当たってこられた先生方から、また、卒業生にとっては、さまざまな場や機会にお世話になられたことのある大先輩の方々から、これまでのご活動や、活動のなかで大切にされてこられたことなどを、大変凝縮した内容で寄稿していただきました。

編集者として、先輩方の貴重なご体験と、豊かなご活動とを重ねあわせながら読ませていただき、もう少し紙枚を増やして書いていただければよかったと、反省と同時に、悔やまれます。

災害看護学における先駆的取り組みでは、本学がリードし、これから取り組んでいくわが国初の共同大学院構想について、ご紹介できたことを大変うれしく、また誇りに思います。皆様方には、今後の発展を是非、注視して、ご支援をいただけると幸いです。

（森下・池添）

事務局

〒781-8515　高知市池2751-1　高知県立大学看護学部
Fax：088-847-8750

ホームページアドレス

高知県立大学
http://www.u-kochi.ac.jp/

高知県立大学看護学部
http://www. u-kochi.ac.jp/~kango/